

農^{kan}環^{nou}健^{ken}

～医農地（いのち）をつなぎ未来をつくる～

平成28年1月1日発行

第 **11** 号

伊豆の国だより

Public Interest Incorporated Foundation

Institute for Agriculture, Medicine and the Environment

●平成28年：新しい年を迎えて -農医連携の必要性-

●「稲と農民」と「松と竹」と「華と紫雲」と「健康と土壌」

● 第5回農業・環境・健康研究所シンポジウム
「土壌と人間 -国際土壌年2015を祝して-」が開催された

● 第5回農業・環境・健康研究所シンポジウム抄録
「土壌と人間」 1. 国際土壌年2015

● 土壌の神秘 7：土壌と文学 その2；外国編

● 土壌と科学 3：塩入松三郎

随想・医農地の形象（いのちのかたち） その11 真実は一つではないという視点

本の紹介 生きものの語り

平成 28 年：新しい年を迎えて－農医連携の必要性－

新しい年が明けました。おめでとうございます。みなさまの暖かいご支援のもとに「伊豆の国だより」は 11 号を迎え、三回目の新年の挨拶を送ることになりました。慶賀に堪えません。新年にあたり、再び農医連携の必要性を強調させていただきます。

火の国、のちに肥後の国と呼ばれた今の熊本県に、後世になって農学と医学の泰山北斗（泰斗）と呼ばれた二人の青年が、同じ時代に熊本洋学校と熊本医学校で、それぞれ農学と医学を学んでいました。若き横井時敬（ときよし）と北里柴三郎でした。

近代農学の始祖といわれる横井は、万延元年（1860）に肥後国熊本城下の藩士横井久右衛門時教の四男として生まれました。北里の誕生（1853）7 年後のことです。15 歳で熊本洋学校を卒業し、アメリカ人教師ジェーンズの助手となり後進の指導に当たり、20 歳の明治 13 年（1880）、東京駒場農学校農学本科を卒業し、駒場農学校農芸化学へ入校しました。

その後、明治 18 年（1885）から福岡県農学校教諭となり、「種籾の塩水選種法」を考案し、明治 27 年（1894）東京帝国大学農科大学教授、明治 44 年（1911）から昭和 2 年（1927）まで東京農業大学学長を兼務しました。この間、作物学、栄養学および農業経済学の大家としての活躍のみならず、教育者、社会啓蒙家として日本の社会に大きく寄与しました。とくに横井の言う「実学思想」は、彼が残した多くの「言葉」の中によく表れています。曰く、「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」「農学榮えて農業減ぶ」「人物を畑に還す」。すでに、この頃においても農学と農業が融合していなかったのでしょうか。

近代医学の父と称される北里柴三郎について、ここでの説明は必要ないでしょう。北里はオランダの医師マンスフェルトに学び、東大医学部時代の明治 11 年（1878）に医道論を書き、破傷風菌の純粋培養（明治 22 年）やペスト菌の発見（明治 27 年）など、学術のうえで大きな成果をあげました。さらに重要なことは、横井と同じように「実学」の思想の重要性を説き明治時代を発展させた先駆者でもありました。

さて、21 世紀もすでに 16 年が経過しました。19 世紀半ばから 20 世紀にかけては、科学技術の大発展とそれに付随した成長の魔力に取り憑かれた世紀といえるでしょう。このような成長を支える科学技術は、おおよそ 150 年前にはじまり、その後たちまち肥大・拡大し、20 世紀から 21 世紀初頭を駆け抜けました。この潮流の中で、われわれは物を豊かに造り、その便利さを享受すると共に、この技術を活用し政治や主義や宗教にからむ多くの戦争を行ってきました。今もそのことは続いています。

これらは「技術知」による成果でした。そのことが文明の発展でもありました。しかし、この「技術知」の多くは、「知と知」「知と行」「知と情」「過去知と現在知」などを連携し発展することのない、知の分離という「分離の病」を引き起こしました。その「分離の病」は科学技術に留まらず、次つぎと他の事象へと伝染していきました。曰く、「人と自然」「親と子」「生徒と教師」「公と私」「先祖と現世」「体と心」「農学と医学」「土壌圏と大気圏」などの分離の病であります。

たとえば「体と心」を扱う医学を考えてみます。医学の目標とする健康とは、健体康心すなわち体が健やかで心が康らかである状態をいいます。しかし、現代医学の技術の多くはこのこ

とを認知していないようです。認知していても、なかなか実学にもちこめないようです。体と心が「分離の病」を起こしているのです。ましてや体ひとつとっても、「分離の病」の対象になります。多くの医者が、目の専門家、鼻の専門家、内臓の専門家などとして活躍しています。しかし、人間の体が分けることの出来ない一つの生命体であるという視点で、人間の健康を考える医者はそう多くはないでしょう。

われわれは、「分離の病」を克服し、「統合知」を発現させなければ、真の意味での幸福や健康を獲得できないでしょう。分離の病に四つの事象があります。「知と知」の分離、すなわち専門主義への埋没。「知と行」の分離、すなわち理論を構築する人と実践を担う人との分離。「知と情」の分離、すなわち客観主義やバーチャルへの執着。「過去知と現在知」の分離、すなわち文化の継承や歴史から学ぶ時間軸の分離、不易流行や温故知新などの言葉でも表現できる。

農学の知と医学の知は、生命科学の探究の結果うまれた知ですから、「医食同源」「身土不二」「地産地消」「四方四里に病なし」などの言葉があるように、本来統合されなければならない知です。北里柴三郎の「医道論」に、医道についての信念が「人民に健康法を説いて身体の大切さを知らせ、病を未然に防ぐのが医道の基本である」「病気を未然に防ぐ為には、病気の原因と治療、つまり、医術を徹底的に理解しないと達成出来ない。真の医を施すには医術の十分な研究が必要である。医学を志すものは理論技術とも甲乙なく徹底的に研究する必要がある」などと述べてあります。これらのことは、健全な環境のもとで生産され、安全な製造過程を経た食品を食し、健康を保ち病に陥らないことが必要であると解釈できます。北里は、環境を通した農医連携（統合知）の必要性をすでに説いていたのです。

150年以上も前に、同じ肥後の国に生まれた泰山北斗が志した農学と医学の知を連携する農医連携の科学がますます盛んになることを祈念して、新年の挨拶とします。

「稲と農民」と「松と竹」と「華と紫雲」と「健康と土壌」

農学の泰斗である横井時敬（明治・大正・昭和：1860～1927）は、「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」という言葉を残し、後世のわれわれに実学の重要さを論じた。この言葉は、いまでも多くの農学者の心するところである。現在の経営者の言葉、「現場に聞け」「消費者に聞け」にもその片鱗がうかがわれる。

横井の言葉から、反射的に俳人松尾芭蕉（江戸前期：1644～1694）の言葉が想起される。曰く「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」。松のことが知りたければ、松に聞けばいい。竹のことが知りたければ、竹に聞けばいい。人に聞くよりも、直接その物に向き合った方が、物の本質は見えてくるとの意であろう。芭蕉が俳句を作る秘訣について述べた言葉である。自然のことは自然が一番よく知っていると理解できる。つまり、いくら知恵や想像力を働かせて、物事や人について理解しようとしても、その範囲は限定される。何かを知りたいとき、早くて確実な方法は、専門家に直接聞くことなのである。

横井や芭蕉は、一遍宗（時宗）を創設した一遍上人（1239～1289）が信濃国佐久郡で行った別時念仏のときの言葉を知っていたのであろうか。一遍が別時念仏を放つと、不思議な自然現象が起こった。天に紫雲が現れ、天から華が舞った。一遍の徳に天が感応したと民衆が騒ぎ

出したとき、一遍は「念仏とはそういうものではない！」と民衆を叱り、次のように語ったと言われている。「華のことは華に問え、紫雲のことは紫雲に問え、一遍はしらず」。この正直な言葉こそ自然生態系の真髄を語っている。またこの突っ放した言葉に、一遍の人物の偉大さと凄み、さらには思想の深さを感じられる。

人間の健康は、健全な環境と食べ物に依存している。健全な食べ物はどこから来るか。コメや野菜は土壌から生産される。肉になる禽獣は土壌からとれる草を食して生きている。とどのつまり人間は土壌を食して生きていることになる。このことは、古往今来そして未来永劫かわることがない。先達の言葉を模倣すれば、健康と土壌の関係はつぎのように表現できないか。「作物のことは土壌に質（ただ）せ、健康のことも土壌に質せ」と。

第5回農業・環境・健康研究所シンポジウム：

「土壌と人間－国際土壌年 2015 を祝して－」が開催された

日時：2015 年 10 月 23 日（金）13:00 ～ 17:30

場所：三会堂ビル 9 階石垣記念ホール（東京都港区赤坂 1-9-13）

主催：公益財団法人 農業・環境・健康研究所

後援：農林水産省、独立行政法人農業環境研究所

協賛：日本土壌肥料学会

挨拶

木嶋利男（農業・環境・健康研究所 代表理事）

演題と講師

国際土壌年 2015

小崎 隆（日本土壌肥料学会 前会長／首都大学東京 教授）

土壌と人間：目録

陽 捷行（北里大学名誉教授／農業・環境・健康研究所 副理事長）

土壌と農業：72 億人を養いきる

三輪睿太郎（日本農学会 会長）

土壌と教育：日本と世界の土壌教育の歴史

福田 直（武蔵野学院大学 教授）

土壌と文学・芸術：農と水と土の思想

大橋欣治（東京農業大学 客員教授／農と水と土の科学文化研究所 代表）

土壌と環境：地球規模での土壌の変化 八木一行（農業環境技術研究所 研究コーディネータ）

土壌と健康：健康資源としての土壌の活用

佐久間哲也（エムオーエー奥熱海クリニック 院長／農業・環境・健康研究所 理事）

シンポジウム開催にあたって

土壌は、衣食住をまかなううえで欠かすことのできない資源です。人間が生きていくかぎり、大気や水や植生と同じように健全に守らなければならない大切な環境構成要素です。地球のもっとも薄い表面をおおっているので地球環境におおきな影響を与え、そして受けています。文化土壌学ということばがあるように、民族の思想・宗教・意識・生活・医療・芸術・文学など、その地域と民族の生業・文化・文明などに深く関わっています。また、地理医学ということばがあるように、人びとの健体康心（健やかな体と康らかな心）、すなわち健康をも左右し

ています。

さらに驚くことには、土壌は、人間とおなじように呼吸しています。じつは、この呼吸の乱れが地球の温暖化やオゾン層の破壊をひきおこしているのです。わたしたち人間が土壌に倫理観をもたず、これを大切に守らなかったための土壌の逆襲ととらえることもできるでしょう。

わたしたち人間は、空気や水がなければ生きていけないように、この土壌を健全に保たなければ生きていけないし、わたしたちがひたむきに築いてきた生業・文化・文明などを健全に維持することができないのです。土壌は、人間やほかの生物と同じような生きものなのです。土壌が生きものだからこそ、人間は土壌とともに生きてきたのです。そして、人間はこれからも健全な土壌なくして生きてはいけません。

人間にとって土壌がいかに重要な資源であるかを思い致すため、今回「土壌と人間—国際土壌年 2015 を祝して—」と題したシンポジウムを開催します。

漢の時代の劉向の「説苑」という書の「臣術」篇に、孔子の語った「土」に託する想いが記述されています。

為人下者、其犹土乎！種之則五穀生焉、禽獸育焉、
生人立焉、死人入焉、其多功而不言

「人の下なるもの、其はなお土か！これに種えれば、すなわち五穀を生じ、禽獣育ち、生ける人は立ち、死せる人は入り、その功多くて言い切れない」と読めます。

孔子は、土壌の偉大さは熟知していました。孔子が指摘するそのように偉大な土壌を、われわれ近代人はどのように見てきたのでしょうか。

第 5 回農業・環境・健康研究所シンポジウム抄録

土壌と人間 1. 国際土壌年 2015

第 5 回農業・環境・健康研究所シンポジウムの抄録を順次紹介していく。第 1 回目は首都大学東京 都市環境学部 小崎 隆教授の「土壌と人間 1. 国際土壌年 2015」を紹介する。

1. はじめに

一般市民の皆様が「土壌」と耳にされたときに、まず思い起こされるのは「ドジョウ（泥鰌）」でありましょう。この不幸はわが国だけのことでなく、海の向こうの見知らぬ土地で、彼らの言葉で話しても、事情はよく似たものです。このように土壌は市民の皆様にとって分かりにくい存在ですが、近年、その傾向はさらに進行しています。戦後 70 年の間に小学校の学習指導要領（理科）の「土」なるキーワードは 52 件から 1 件に激減し、今や約半数の高校生は「土について知りたいとは思わない」と答えています。このような現状を憂慮し、国際連合は土壌に対する認識の向上と適切な管理を支援するための社会意識の醸成を目的として、今年 2015 年を「国際土壌年」と宣言しました。

2. 何が問題なのか？

そもそも土壌は人間が農業を開始した 6000 年以上も前からつい最近までは大きな関心事で

した。土が万物の起源ないしは基礎であり、私たちの考え方や行動の拠りどころであることは、旧約聖書、ギリシア哲学、陰陽五行説などを講釈する必要はありますまい。しかし、カーターとデールが「文明人は地球の表面を歩き、その足跡に荒野を残した」と、その著「土と文明」の中で1955年に警告した土壌劣化という現象は、メソポタミアやインダスの古代文明を、繁栄後800～2000年程度の差はあれ、結果的に滅亡に追いやり、同様の過ちは20世紀前半の合衆国西部でも繰り返され、そのありさまはスタインベック著「怒りの葡萄」で広く世に知らしめられましたが、必ずしも皆様の中の記憶には残っていないかもしれません。土壌劣化とは、私たちが土地を適切に使わなかった（言い換えれば、必要な施肥や作物・土地管理を怠り、目先の利益だけを追い求めた）結果、その土地が私たちに衣食住を十分に供給できなくなる現象で、土壌侵食、養分や有機物の消耗や過剰、土壌汚染などとして姿を現します。

ここでは、土壌劣化が、ときにはその速度を増しつつ、また、わが国を例外とすることをも許さず、地球の生態系を、さらに私たちの生存そのものを、脅かし続けているいくつかの例について申し上げねばなりません。何故このようなことが繰り返されるのか？土壌保全の大切さ、土壌劣化の恐ろしさを、市民は知らないのか？土壌学の研究者や専門家がそれを知らせる努力を怠ったのか？その両者なのか？いずれにせよ、その責任の多くが、現在と過去を含めた私たち土壌学研究者に帰することを真摯に反省しなければならないのは紛れもない事実であります。

「社稷を思う」という表現があります。社稷とは国家と解されることが多いのですが、本来、私たちの生存の基盤となる「土地（社）」と「五穀（稷）」であり、古来、国の王がそれらの神を祀ることにより国の繁栄と民の平安を祈願してきました。現在、中国の北京紫禁城に近い中山公園には明・清の歴代皇帝が儀式を執り行った社稷壇をみることができます。そこには国とその四方の地域を守護する玄武・青龍・朱雀・白虎を象徴する黄・黒・青・赤・白の五色土が敷きつめられています（図1）。現代に生きる私たちは「宇宙船地球号」の乗組員であるとなえられて久しいのですが、その意味では、社稷は国家より地球そのものと捉えることが必要であり、まさに文字通り今を生きる私たち一人ひとりが土壌を通して考えるべき課題そのものであるといって過言ではありません。



図1 北京中山公園の社稷壇



図2 国際土壌年ロゴ（日本語版）

3. 土壌劣化から私たちのこれからの生き方を考える

たかが土、されど土。実は考えるべきことは山積しており、なすべきことは多すぎて優先順位をつけることは至難の業です。それを皆様に申し上げると、

「それは大変！土壌学者さん、頑張ってください！」。一般市民の皆さんにとっては「他人事」かもしれませんね。もちろん、考えるべきこと、なすべきことの多くは、それを本業とする私たちの仕事です。しかし、私たちだけでは世の中を動かすことはできません。「動かすのは政策決定者であって、私たち市民ではないでしょう」と仰る方も多いかもしれません。確かに、実際に決定するのは政治家（裏方の官僚を含む）や企業の CEO です。しかし、彼らといえども市民の意向を無視することはできないのです。いや、むしろ、彼らはそれに従うのではないのでしょうか。それが主流となるならば。

「土壌のことを考えよう。そして、必要な行動を起こそう」。そのような社会意識の醸成こそが、国際土壌年の目的なのです。「難しいなあ。どうしていいかわからない。（忙しいから）こんなことに関わってられないわ。誰かが（例えば政府が）考えてくれるでしょう。何か決まれば、そのようにするから、何でも仰って」。

このように他人事として思考停止することは極めて危険なことです。いや、大きな悪行、犯罪であると言ってもよいでしょう。かのドイツ系ユダヤ人の哲学者・思想家であるハンナ・アーレントは、亡命先ニューヨークで著した「イェルサレムのアイヒマン」の中で、ユダヤ人虐殺に手を下したナチ強制収容所のアイヒマンの行為は彼独自の極悪非道性によるのではなく、普通の人間が陥る思考停止によるものであり、誰にでも起こり得る（彼女はそれを「悪の陳腐さ」と表現しました）、そして、それはとてつもなく大きな犯罪を引き起こす、と訴えました。私は、今日ここに足をお運びいただいた方々には、決してアイヒマンにならずに「どうすればいいのか。何ができるだろう」とご自身に問い続けていただきたいと切に願っています。

土壌劣化が顕在化するか否かは、人為（人間の欲望）と環境の許容力のバランスで決まります。その昔、天変地異と称する自然災害（一部は人災的要素が含まれていたでしょうが）は神の怒りと畏れられ、それを鎮めるために生贄が捧げられたのは洋の東西を問いません。人や羊など、一番あるいはそれに代わる極めて大切なものと交換に神の許しを乞うたのです。

さて現代はどうでしょうか。百年前とは比較にならないほどの大量のエネルギーを投入し、豊富な科学的知識と高度な技術力により、土壌を操作し、身の回りの物質的快楽を追及し続けています。それに対して土壌を含む環境から土壌劣化というイエローカードとともにツケ（生贄）の請求書を突き付けられているにもかかわらず、江戸っ子のように宵越しの金を持たないのなら、それはそれで粹ですね。しかし、私たちの身の回りを見渡せば、今のツケを払うくらいオプション（例えば自動車、原発、グルメ志向の再考など）は持っていると思います。ツケを払わねばどうなるかに関する予測も私たち研究者は科学的根拠とともに提示しています。にもかかわらず、決断がなされていない、しようとしない、先送りする、考えようとすらしな

い、と言うべきでしょうか。

国際土壌年もあと2か月を残すのみとなりました。来年になるまでに何らかの決断をしないと天罰が下るという訳ではないでしょうが、その間にツケが増えることだけは確かです。そのうちに一発逆転の「代替エネルギー」満塁ホームランが出るさ、と高を括るのはあまりにお気

楽にすぎ、無責任と言われてもしょうがないのではないのでしょうか。

環境問題に正解はありません。現実的な解決法は関係者間・内の「すり合わせ」あるいは「調整」です。これはまさしく関係者が互いにある程度の犠牲を払う（我慢をする）ことに他ならないのです。今、市民（私たち土壌学関係者も含めて）の一人ひとりがしなければならないことは、どのような犠牲を払うかを考え、そのために必要な行動を取ることです。その方法は十人十色であって良いでしょう。国としての政策は一人ひとりの市民の最大公約数とすべきであることは民主主義の基本なので言うまでもありません。

皆様には、是非、もっと深く土壌に興味をお持ちいただき、考え、悩み、周りの人々と語っていただだけませんか。国際土壌年のロゴマーク（図2）が翻るところすべてが市民の皆様にかかれた交流の広場です。「国際土壌年 2015 応援ポータル」サイト（<http://pedologyjp.sakura.ne.jp/iys2015/>）ではそれらの最新情報が入手可能です。

「どうか、近いうちに各種のイベントで皆様に再びお目にかかれることができますように」と心から願っています。是非、手を取り合って、私たちの子供や孫たちを生贄に差し出すことをしなくてもよい未来を創造しようではありませんか。

土壌の神秘 7：土壌と文学 その2；外国編

シリーズ「土壌の神秘」の趣旨は、「伊豆の国だより 2号：土壌と文化 その1：土壌の字解」で詳解した。要約すれば、次のようなことである。われわれ人類が生き続けているように、土壌もすべての生物の基盤として生き続けている。われわれは、土壌が永続的に生き続けていることを確認し、人間に対すると同様、土壌に倫理感をもたなければならない。環境倫理である。さらに、人類が生き続けるための源である土壌を、世代間倫理のもとに未来永劫にわたり安全に保ち、これを継承する必要がある。そうしなければ、人類はいつの日か土壌に逆襲されるであろう。土壌が健全に維持されることと、人間の健康は切り離すことができない。土壌に害のあるものは人間にも害がある。人間は、土壌から生産されるものを食べて生きているからである。

土壌を大切に保全しなければ、人類の未来はない。そのために、生業はもとより、土壌は文化－文明－健康－文学－芸術－倫理などとも密接に関係していることを紹介し、土壌の神秘を探索することにした。今回は「土壌と文学 その2；外国編」と題して、国外のさまざまな文学作品などの一部を紹介し、土壌がこれらの作品の中でいまなお営々と生き続けていることを実証する。

古代インドバラモン教の根本聖典「アタルヴァ・ヴェーダ」の「ブーミ（大地）の歌」、中国の孔子の「為人下者、其犹土乎！」、ロシアのドストエフスキーの「カラマゾフ兄弟」「罪と罰」、ドイツのフリードリッヒ・ニーチェの「ツァラトゥストラはこう語った」、フランスのエミール・ゾラの「大地」、フランスのジュール・ルナールの「にんじん」、フランスのサン・テグジュペリの「人間の大地」、アメリカのパール・バックの「大地」、フランスのアネット＝チゾン・タラス＝テイラーの「バーバパパ たびにでる」などの作品に散見する著者らの土壌への思いを紹介する。

ほかにも数多くの作品があるが、紙面の都合で省略する。最後に、これらの作品を通して文学や詩歌などに見られる著者らの土壌に対する考え方をまとめてみる。

アタルヴァ・ヴェータ讃歌 ―古代インドの呪法―

BC 1000 年ごろの古代インドのバラモン教の根本聖典である。内容は驚くような「呪法」に満ちている。「恋仇の女子を誣うための呪文」「兄に先立って結婚する弟の罪を消すための呪文」「頭髮の生長を増進させるための呪文」「熱病を癒すための呪文」など、すべての項目に食指が動く。

たとえば「熱病を癒すための呪文：タクマンよ、いたるところ砒素を振りかけられ、疾患に取り巻かれ、斑点に蔽われ、多くの苦痛をかもす者よ、放浪する奴隷女を求めよ。彼女を電撃もて襲え」とある。いまではハラスメントもいいところ。

「ブーミ（大地）の歌」は、ここに沁みる。「女にあれ男にあれ人間の中に、幸運・魅力として存する汝の香り、馬・勇士の中にある香り、野獣・象の中にある香り、乙女の中にある光彩、大地よ、そをわれに帯ばしめよ。何人もわれらに敵意を抱かざらんことを」「人間は汝より生まれて、汝の上を歩む。汝は二足のもの（人間）・四足（家畜）のものを担う。これら人類の五種族（全人類）は汝に属す。その人間の上に、太陽は昇りて、光線もて不滅の光明を拡ぐ」「大地の上に、人は神々に祭祀を行ない、よく調理せられたる供物を捧ぐ。大地の上に、いずれ死ぬべき人間は、おのがじし、食物によりて生く。この大地はわれらに生氣と寿命とを授けよ。大地はわれをして長寿を得しめよ」。

孔子の言葉：劉向「説宛」の「臣術篇」

漢の時代の劉向が「説宛」という書の「臣術篇」に、孔子（BC 552 ～ 479）の言った「土」に託する想いが記述されていると、林蒲田著の「中国古代土壤分類和土地利用：科学出版社、北京（1996）」にある。

為人下者、其犹土乎！種之則五穀生焉、禽獸育焉、生人立焉、死人入焉、其多功而不言。

人の下なるもの、其はなお土か！これに種えれば、すなわち五穀を生じ、禽獸育ち、生ける人は立ち、死せる人は入り、その功多くて言い切れない。

寡聞にして孔子について知るところが少ない。しかし論語についてのみ言えば、自然のことを多くは語っていない。論語には、自然に関する以下のような魚の話があるだけである。「宓子賤（ふくしせん）、単父を治めて三年、巫馬旗（ふばき）これに往く。夜に漁する者あり、魚を得てこれを逃がす。問うて曰く、漁するは魚を得んが為なり、何故捨てるか、と。答えて曰く、宓子（ふくし）は小魚を取るを欲せず、捨てるは小魚なり、と。巫馬旗帰し、孔子に告げて曰く、宓子の徳至れり。民、闇にありて傍らに嚴刑あるが如し」と。

上述した孔子の「土」への思いを知るまでは、孔子は儒者であって、自然についての関心が薄いと思っていた。孔子への見方が間違っていたと、反省すること頻り。

ドフトエフスキーの「カラマーゾフ兄弟」と「罪と罰」

ドフトエフスキー（1821 ～ 1881）の作品には、大地に接吻する場面がたびたび登場する。

これは、母なる神は一般的な多産、肥沃、豊穡をもたらす神で、大地の豊かなる体現であるとする大地母神を讃称するためであろう。土壌は「大地の母」として描かれる。

またこの時代は、社会や知識人が伝統的なロシア的根源や土壌を忘れた。安易に西欧化(近代化)されていくこのような社会的風潮を批判した。土壌と神を孕むロシアの民衆とのつながりや、ロシアの伝統的な土着精神(ロシア正教や民間信仰)を基盤としていくことを重視する立場の土壌主義が台頭した時代でもあった。

イデオロギーのほかに、さらに世界の流れが資本主義に向かっていったため、生きる基盤としての大地へと精神性が回帰していったのではなかろうか。それら諸々の事象が融合して、この時代の文学に土壌が表現されていったと考えられる。

「カラマーゾフ兄弟」のなかの大地への接吻の場面をいくつか紹介する。「彼らは長老(ゾシマ)の前にひれ伏し、涙を流し、その足に接吻し、その足の立っている地面に唇を押しつけ…」「墮落の底より魂をふるい立たせんそがために古き母なるこの大地(つち)と結べ合えかしとこしえに。しかしどうやってこのおれが大地と永遠に結びつくか、そこが問題なんだ。おれは大地に接吻しなければ、大地の棟を切り裂くこともしない：長男ドミートリー」「そこでヨブは身につけたものを引き裂き、大地にひれ伏して叫んだ『われ裸にて母の胎を出たり、また裸にて大地に帰らん、エホバ与えエホバ取りたもうなり、エホバの御名は永遠に讃むべきかな!』：ゾシマ長老」「またもしすべての人に見棄てられ、無理に追い払われるようなことがあったならば、そのときはただ一人、大地にひれふし、土に接吻し、大地を涙でうるおすがよい。そうすれば、お前たちのその孤独の姿は誰にも見聞きされなくても、大地はお前の涙から実りを与えてくれるだろう：ゾシマ長老の談話」「孤独の境遇にあるときは、神に祈れ。大地にひれ伏して、土に接吻することを愛するがよい。大地に接吻して、倦むことを知らず飽きることなくこれを愛せ。あらゆる人を愛し、あらゆるものを愛し、愛することの喜悦と感動を探し求めるがよい。喜びの涙で大地をうるおし、その涙を愛するがよい：ゾシマ長老の談話」「静かに椅子から床の上へと降り、その場にひざまずいた。それから顔を下にし大地にひれふすと、両手をひろげ、心からの歡喜にあふれた様子で、(彼がたったいま教えたように)大地に接吻し、祈りのことを口にしながら、静かに喜ばしげにその魂を神にゆだねたのであった：三男アレクセイのノート」「わが主は勝ちたまえり！キリストは沈みゆく太陽に勝ちたまえり！と彼は両手を太陽のほうへ差しのべて、狂ったように叫んだ。そして、大地に顔を押しつけたまま、まるで小さな子供のように、声をあげて泣き出した：ゾシマ長老の死、フェラポント神父」「地上の静寂は天上のそれと一つに溶け合い、地上の神秘は星の世界の神秘と触れ合っているように思われた…。アリョーシャはじっと立ったまま、それらのものを眺めていたが不意に足でもなぎたおされたように、がばと大地にひれ伏した」「なんのために大地を抱擁したのか、彼にはわからなかった。またどういふわけで大地に、この広い大地に接吻したいという抑えがたい欲求にかられたのか、彼には自分でもはっきりと説明はつかなかった。しかし彼は泣きながら、涙にむせびながら大地に接吻し、大地を涙でうるおした。そして自分は大地を愛する、永遠に大地を愛すると夢中になって誓うのであった：三男アレクセイが僧院を出る前」

「罪と罰」に話を移す。「ふいにソーニャの言葉が思いだされた。『十字路へ行って、みなにお辞儀をして、大地に接吻なさい。あなたは大地にたいしても罪を犯したのです。それから世

界じゅうに聞こえるように言いなさい、私は人殺しです！と』この言葉を思いだしたとたん、彼の全身はがたがたとふるえだした。この間からずっと、とりわけこの数時間にはげしく、彼を抑えつけてきた出口のない哀傷と不安があまりにも大きかったせいだろうか、彼はこの新しい、なんの欠けるところもなく充実した感覚の可能性に、文字どおり身をゆだねた。その感覚は、ふいに、発作のように、彼を襲った。心の底に、ひとつの火花のように燃え立つと見るまに、それは火のように燃えあがって、彼の全身をとらえた。彼の内部のいっさいが一時にやわらげられ、涙が目にあふれてきた。立っていたそのままの姿勢で、いきなり彼は大地に倒れ伏した……：ラスコーリニコフ」「彼は、広場の中央にひざまずき、地面に頭をすりつけ、愉悦と幸福感に満ち溢れて、汚れた地面に接吻した。彼は立ち上がると、もう一度お辞儀をした」。

「カラマーゾフ兄弟」のアレクセイは、尊敬する修道士の死体が腐ることに信仰を失いかけるが、カナン書の一節から『生きている』と直感し、その高揚感から大地に接吻する。大地を愛するという意味であろう。「罪と罰」のラスコーリニコフもアレクセイも同じで、自分がゼロになり回帰する。大地と人間の交感。この大地は自分の心の中にある大地で、それに救われるという希望を失わずにいられるという意味があるのではないだろうか。大地の感覚を持つことが人間の希望であると言っているように思われる。

フリードリヒ・ニーチェ（1844～1900）の「ツラトウストラはこう語った」

「見よ、わたしは諸君に超人を教えよう。超人は大地の意義なのだ。諸君の意志は『人こそ大地の意義であるべきだ』と言いたまえ」「わたしは諸君に切に懇願する。吾が同胞よ、大地に忠実でいなさい、そして諸君に天上の希望説く連中のいうことを信じてはいけない。毒をばら撒く連中なんだ、彼らがそのことを知っているか、知らないかに関わらず」「生命を侮辱する連中なんだ。つまり死に損ないで自分で自分に毒を盛られている連中なのだ。連中には大地はうんざりしている。立ち去りたければ去ればいいのだ。かつては神を冒瀆することが最大の冒瀆だった。しかし神は死んだのだ。だから神への冒瀆というのものはやない。大地を冒瀆することが、そして探求できないものの内臓を大地の意義よりも尊重することが、今やもっとも恐るべき事なのだ」「かつて靈魂は肉体を軽蔑して眺めていた。そしてそのときにはこの軽蔑がもっと気高いものだったのだ。靈魂は肉体が痩せ細って、すさまじく、飢え死にしてしまうのを欲した。そうして靈魂は肉体と大地から逃れ出ようと考えたのだ」「おお、この靈魂は自ら痩せて、すさまじくそして餓死状態にあったのだ。そして残虐がこの靈魂の淫蕩だったのだ」。

超人が『大地』の意味であり、その大地に忠実であれ！とはどういうことであろうか。人間は近未来にニヒリズムが最大な状態になる。しかし、「ツァラトウストラ」は「人間は克服されるべき何ものである」という。これは積極的なニヒリズムで、生の大きい肯定者である新しい価値・目標をもった「超人」に成らなければならないという。だから、わが兄弟たちよ、このあなたがたの徳によって、大地に忠実であってくれと叫ぶ。あなたがたの贈り与える愛と、あなたがたの認識は、大地の意義に奉仕する者であってくれと叫ぶ。わたしがあなたがたに心から願うのはこのことだと叫ぶ。人間の行き着くニヒリズムの先には、超人が必要で、その超人は、けっして大地を冒瀆しない、大地を高く崇める人のことなのである。土壌を崇める人こそ超人だとツァラトウストラは語る。勝手な解釈だろうか。

エミール・ゾラ（1842～1902）の「大地」

「ああ、この大地を、彼はついにこれほどまでに愛するようになったのである！そして世の常の農民の烈しい貧欲ばかりではない感傷的な情熱で、否、知的に近い情熱で深く愛した。この大地こそ、彼に生命をも実体をも与えてくれた人類共通の母であり、やがてまた帰りゆくところと、感じていたからである」「脂ぎった豊沃な感じの土が、彼の足にねばりついて、まるで抱き止めようとするようだった。大地はもう一度彼をすっかりとりこにした。…大地のほかには女はない」「死骸と種子、そしてパンは大地から生まれでるのである」「掻き立てられた土の中から湧き上がる強烈な臭いは、彼を酔心地にした。それは胚種を発酵させる湿潤な土の臭いであった」。

この作品は、大地は巨大な生命をもって人間生活のあらゆる面に入り込む、という底知れない深さをもったおそろべき作品である。

ジュール・ルナール（1864～1910）の「にんじん」

「ミミズってものはきたないものじゃない。この世でいちばんきれいなものだ。土しか食べんしな。つぶしてみても、吐くのは土だけだ。わしだったら、ミミズを食えといわれれば、食ってもいい：名づけ親のおじいさん」「ぼくのぶん、おじいさんにあげるよ。食べてみたら：にんじん」。

サン・テクジュペリ（1900～1944）の「人間の大地」

この本の冒頭は、「大地はわれわれ人間について、万物の書物より多くのことを教えてくれる。大地はわれわれに抵抗するからである。障害と力くらべをするとき、人間はおのれを発見する」で始まる。

中頃の表現には、「この情けない運命をまえにして、わたしはひとりの男の真実の死を思い出した。それは、つぎのように語ったある庭師の死だ。『ねえ、あなた…ときには、土を掘り起こしながら汗もかきました。…ところが、いまとなつては、土を掘って、掘りまくりたいですね。土を掘り起こすという仕事が、わたしにはそんなにすばらしいものに思われるんですよ！土を掘り起こしているときは、そんなに自由なんですよ！それに、世話してきた樹だって、これからはだれが刈りこんでくれるんでしょう？』『おまえはよく働いた。おまえには眠る権利がある。さあ、おやすみ』と。彼のほうは、あいかわらず横になったまま、一種眩暈にほかならぬ飢えを感じてはいたが、それのみが心を苦しめるはずの不正義は感じていなかった。彼はすこしずつ土に同化しつつあったのだ。太陽によって乾かされ、土に迎え入れられながら。三十年の労働のあと、眠りと大地への権利を手に入れたのだった：解放された囚われの男）。

この本の最後は、「精神の風が粘土のうえを吹きわたるとき、はじめて人間は創造されるのだ」で終わる。

パール・バック（1892～1973）の「大地」

「子供たちは数日前から、土を水でといて食べていたのだ…これは恵みの女神の土とよばれていたが、それは結局生命を支えることはできないにしても、わずかながら滋養分になるもの

が含まれているからだだった。大地の人間だった。足の下に大地を感じ、春は鋤を押し、秋は鎌を手にするのでなければ、生きていることに何の充実感もありはしなかった」「王龍は、墓所として、丘の上の橐の木陰になる畑のなかによい場所を選んだ…高台で、小麦には絶好の土地だったけれども、惜しいとは思わなかった。これこそ、彼ら一家がこの土地に根をおろしたしるしになったからであった。生きているあいだも、死んだあとも、彼らはみずからの土地で眠るわけだった」。

王龍は死の床で、息子たちに対して言う。「わしは土地から生まれて、土地に帰らねばならんのだー土地を持っていれば生きていられるー土地を奪えるものは誰もいないー」「もし土地を売れば、それで終わりだ」。

アネット＝チゾン、タラス＝テイラー（1942～）の「バーバパパ たびにでる」

バーバパパの一番初めの話が、この「おばけのバーバパパ」という絵本である。この本がフランスで生まれたのは1970年のこと。日本にバーバパパがやってきたのは1972年。バーバパパは、生まれてから45年以上も世界中の人から愛されている。この「おばけのバーバパパ」のなかで、バーバパパは土から産まれている。花の種と一緒に土にバーバパパの種が埋まっていたのか。フランソワという男の子が花に水をやると、“おばけのバーバパパ”が土の中から出てきたのである。

このほかにも土壌を語る数多くの作品がある。作品の語る内容をいかにまとめてみた。

1. 人間は土から生まれ、土の上で生き、死んで土に帰す。土の功は言い切れない。食すこともできる。
2. 罪を犯した者は、大地に懺悔することによって救われる。
3. 資本主義的な流れの中で、大地母神の讃称と土壌主義が失われていった。
4. 未来の人間は、大地の意義を知っている。そうでない人間に大地はうんざりしている。
5. 旧約聖書では神が土（humus）から人間（homo、human）を創りあげた。この人間は、果敢な行動と厳しい精神を備えて初めて、土に対処することにより人間性（humanity）を獲得し、謙虚（humility）な人間になる。

土壌と科学 3：塩入松三郎

ラテン語の言語において、『大地』と『人間』と『謙虚』は、実は語源をひとつにする。

大地は humus、そこから humanism とか human が生じ、さらに、

ヒューマンをヒューマンとする正しい心的態度としての

humility（謙虚・謙遜）の語が生まれた。

犬養道子著「人間の大地」より

塩入松三郎（1889～1962）は今の長野市に生まれた。水田土壌、土壌化学、休閑期の土壌乾燥効果などの研究において業績を残した土壌学、肥料学の泰斗である。1942年、論文「土

壤及肥料の無機主成分の微量定量法に就て」で東京大学農学博士、「水田の化学的研究」により1945年に学士院賞、1957年に文化功労者を受賞した。主な著書に「土壌学研究」がある。滋賀県立農業短期大学の初代学長に就任した。東京大学名誉教授である。

日本は、稲作民族のうちで、もっとも遅れて水田稲作の技術を受け入れた地域の一つである。稲作期間中に雨が多くて水が豊富なこと、土壌が肥沃（ひよく）で生産力が高いことなど、好適な自然環境に恵まれていた。このため、弥生時代以後の稲作は着々と面積を広げていく。九州から瀬戸内を伝播して畿内に到達した水田稲作は、日本の国（大和朝廷）を形づくるための強力な礎（いしずえ）となった。

日本の文化は稲作の歴史とともにあった。古くは縄文時代の板付遺跡、弥生時代の垂柳遺跡、登呂遺跡など、また奈良時代から平安時代にかけての班田収授法、荘園制、豊臣秀吉の太閤検地、明治時代の地租改正、などがそのよい例である。稲作文化とは、イネの栽培にかかわる農法あるいは技術をはじめとして、米を主食とする食文化のすべて、さらには豊穰のための祭りごとや信仰などに象徴される民族と儀礼あるいは宗教、さらには小さな村にはじまる祭りに始まる社会組織から、大きくは国家の体制にまで及ぶ、私たちの日常の営為とその周辺のおおかたの総体にかかわるひとつの文化体系にほかならない。

同じ土壌で千年以上も栽培し続けられるこの稲作農法は、世界の農業の中でも特異的である。水田で稲作が半永久的に続けられる理由は、連作障害がまったくないことと、植物に必要な三大必須元素の窒素・リン・カリウムが自然界から絶えず供給されるからである。

塩入は、この稲作農法に土壌学の面から多大な貢献をした。その成果は、今もなお世界に通じる業績として輝いている。それらは、「脱窒現象」「全層施肥」「基肥」「老朽化水田」「高位収獲水田の解明」「水田土壌学の大成」などという専門用語で表現される。

戦後の食糧難克服に、塩入のこれらの研究が大きく貢献したことは特筆されるべきだろう。とくに水田の「脱窒現象」は、いまでは生態学、環境科学、地球科学の窒素における基礎的な知識として生きている。この知識は、今の世界が当面している地球の温暖化やオゾン層破壊問題に欠くことのできないものである。脱窒現象の過程で生じる亜酸化窒素（ N_2O ）の研究には、不可欠な知識でもある。また、「水田土壌学」は、水田から発生し温暖化に影響するメタンガスの研究の基礎を提供した。

春の七草考

七草の起源は、中国の前漢時代に始まります。わが国では、万葉の時代に大陸から伝わり、伊勢神宮の祭式に取り入れられました。七草が宮中に伝わり、皇族関係者に“七草粥”として連綿と受け継がれてきました。その風習は、やがて武家から裕福な商家に伝わりました。その後、必ずしも七種のそろった粥である必要のない手軽さから庶民にも広がりました。現代は、お餅やお節料理などにより弱った胃腸の回復に、さっぱりした七草粥が好まれるようになって、正月の恒例行事になっているようです。

七草の考え方は、南北朝時代の皇族の家に生まれた歌人四辻喜成（よつじよしなり）が、鎌倉時代末期に源氏物語の注釈書「河海抄」（かかいしょう）に記載されている作者不詳の「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞ七草」から引用して広

がりました。これが七草を揃える定説になっています。

セリ科セリ属セリは水辺を好む植物です。山から水が湧き出ている明るいところで、しばしば見受けられます。

アブラナ科ナズナ属ナズナはペンペン草の別名がありますが、夏には消えてなくなるので“夏無”（なつな）から変化したと言われています。

キク科ハハコグサ属ハハコグサが“ごぎょう”と呼ばれた植物です。古い時代、ゴギョウは母子餅の材料に使われていました。ハハコグサは越年草で秋発芽します。冬の寒さを耐えたロゼット状から軟らかい新芽が大きく育つので、それを摘んで食べます。

“はこべら”はナデシコ科ハコベ属ハコベが現在の呼び名です。ハコベラの語源はさまざまあります。小さな葉が布切れの集まっている様子から、この名がつけました。

キク科ヤブタビラコ属コオニタビラコが“ほとけのざ”です。現在のホトケノザはシソ科オドリコソウ属です。たまにこの種を七草だと思って、間違えて食べる人がいます。食べても無害ですが、あまり美味しいものではありません。平安時代のホトケノザも今のホトケノザも、仏像に見られる蓮華座に似ているので付いた名前です。しかし着目点の違いを見てみると、コオニタビラコは越冬用にロゼット状になっている葉を“仏の座”に見立てたものです。現在のホトケノザを見ると、茎上部の葉は、無柄となり茎に直について2枚の葉で円形状になっています。その上に花が付いた様子に“仏の座”を見立てて付けたものです。

アブラナ科アブラナ属カブを“すずな”と言い、鈴花菜（すずな）と書きます。その形が鈴に似ているから付いた解かりやすい名前です。

アブラナ科アブラナ属ダイコンの昔の名“すずしろ”、現在名は大根。大根は、煮ても生で食べても美味しく、お腹を壊しません。このことから、役が当たらない役者を大根役者と言ったのは有名な言葉です。

(写真・文 勝倉光徳)



その11 真実の一つではないという視点

不都合な真実

例えば国家的な大事件が起きて、国によって報道の内容が違い、どの情報が正しいのかわからなくなることがあります。国によって言葉も考え方も方針も違いますし、真実を報道すべきマスメディアにも規制や情報操作があるわけですから、当然かもしれません。しかし、まったく正反対の情報を目にする、真実はどこにあるのか知りたくなるのが人情です。ネット上で真実を巡っての論争が巻き起こり、お互いを非難し合う状況は珍しくありません。そうなるとうすうすう表面的な見方を敬遠し、たくさんの情報を仕入れ、世界がとんでもない深い陰謀によって動かされていると主張する方が賢く見えてくるから不思議です。

社会構成主義では、現実世界で起きている事実やその意味は、個人や集団の頭の中で作り上げられているに過ぎないと考えます。しかし、現実世界がパソコンの中のバーチャルリアリティのような幻想であるという世界観ではありません。起こってきた事実はそれを観察する人がいなければ事実とは認定されず、観察した途端に、個人のフィルターを通すわけですから、必ず解釈が張り付きます。真実はひとつではない。少なくとも万人が共有・納得できる真実はない、と言うべきでしょう。真実は枠組や解釈の分だけあるという前提で議論をしていく立場です。

医学に絞ってみると、医学的真実は医学という学問の中で言語や概念を統一させて、無理矢理ひとつにして作り上げていきます。そうしなければ医学は成立しません。ところが、閉じた学問上で通用する真理を、医療というオープンシステムに落とし込むと、たちまち絶対性や権威を失っていきます。現在の医学理論が将来的に誤りであったと証明されたり、新しい概念が登場したり、という意味だけではありません。医学が相手にする細胞や動物や病気は無名性のものですが、医療は病む特定の個人を対象にしながら、特定の社会保障や経済制度の上に成り立っています。しばしば患者は医師とは違う真実を見えています。医師はそれを間違いであると断定し、修正をはかろうとし、大きな対立や溝を生みます。ところが、医師自身やその家族が患者の立場になった途端に、医療に対する考え方が変わってしまうということも珍しくありません。ただこの分野では以前と比べ、患者の視点から医療を見直そうという動きが活発化していることは確かです。お互いの立場を尊重し、新たな真実を一緒に作り上げていく議論があれば、その対立も充分意味のあることになります。

では、公的な立場の者が「不都合な真実」を隠すことで現在の国民に損失を及ぼす可能性があるとしたらどうでしょうか。それを糾弾し修正することが唯一の正義に見えると思

います。しかし、隠す者はそうすることで将来の国民の損失を減らすと考え、それが真実だと思い込んでいるのかもしれませんが。いや国民ではなく、国や企業を守ることを第一義と考えているかもしれません。そもそも道義的責任は法的責任と比べて軽く、意味が無いと考えている人もいるはずです。それを正統的な真実と思い込むまでには、私たちにはうかがいしれない理由や歴史があるのですが、社会の根幹を揺るがす病根になる危険性をはらんでいます。国や民族や宗教などの対立はしばしば不毛で永遠に続く大きな闘争を引き起こしますが、これはお互いが「こちら側が真実である」と考え、相手を分からず屋と決めつけているせいでもあります。

真実は藪の中

芥川龍之介に『藪の中』という短編があります。あらすじは旅の途にある武士の夫婦が盗賊と出会った結果、夫の死骸が発見され、検非違使によって関係者が事情聴取される、という単純なものです。ところが登場人物が同じエピソードを全く違う筋で語り、しかも誰が真実を語っているのか読者にはわからないような複雑な構造を持っています。考えるほどに、真実がどこにあるのか、いやそもそも真実とは一体何なのか、といった真実の意味性を揺るがせる哲学的な問いを呼び起こし、発表当時「真実は藪の中」という流行語が生まれました。

後年、黒澤明監督が映画『羅生門』で登場人物の一人に語らせる目撃談として使われます。映画自体は国内では難解とされ不評でしたが、日本映画初となるヴェネツィア国際映画祭金獅子賞とアカデミー賞名誉賞を受賞したため、評価が一変しました。この状況を黒澤監督は「まさに映画そのもの」と述懐しています。近年、スティーブ・ジョブズの自伝で The Rashomon Effect（羅生門効果）という言葉が使われており、日本人に広く知られることになりました。これは「同じ事象でも人によって見方が異なる現象、複数の心理的事実があること」を意味するそうです。

カウンセリングの中で当事者とその家族との間で違う真実が語られることは珍しくありません。はっきりとした妄想・幻覚とわかるものであれば良いのですが、聞けば聞くほど「藪の中」に迷い込んでいきます。同じ現実世界に生きていると思っていても、人はそれぞれが違う世界観・物語を生きているのだという思いを深くします。明らかな妄想や勘違いだと判明しても、本人にとって絶対的真実である限り、それを否定するカウンセラーは信用できない人になり、心を閉ざしてしまいます。こうなると治療の機会ばかりか、社会生活に戻るチャンスも奪われかねません。司法の場とは違い、治療の前段階として治療者は真実に対する慎重な態度が求められます。

ケアや医療の場でなく、家庭内で家族の「真実への態度」が試されるのが高齢者の認知症です。直前の記憶が失われ、何度も同じ話をし、食事を食べたことも財布の場所も忘れてしまうのは「落ち度」ではなく、病状です。しかし、家族はそれを受け入れることが難しく、間違いをただし、思わず怒ったり嘆いたりし、そのことでますます信頼関係を壊し

ます。抜けた記憶を作り話で補うため、かつて「嘘はいけない」と自分に教え込んだ親の態度に裏切られた気持ちがする介護者もいます。同じ時間を過ごしていても、まったく違う世界を歩んでいるということがわからない限り、問題が大きくなり、虐待などの事件に発展する可能性があります。

開かれた対話

最近、精神医学の分野で根本的に常識を覆す出来事が注目されています。一般に統合失調症は数ある精神病の中で重症の部類にあると考えられています。多くは青少年期に発症し、幻覚や妄想によって感覚・思考・行動が障害され、社会生活ばかりか日常生活に支障をきたします。その発症率は100人に1人と珍しく無く、慢性の経過をたどりやすいため、医療や福祉の継続的な関わりが欠かせません。薬物療法によって初発患者さんのほぼ半数は不安定な状態を脱することができますが、本人や周囲の人生に長く暗い影を落とすイメージは拭えませんでした。ところが、フィンランドの西ラップランドにあるケロプダス病院の対人援助法がこの状況を一変させます。オープンダイアログ、開かれた対話と呼ばれています。

その方法はシンプルです。統合失調症が疑われる病状を認めた本人やその家族から連絡があれば、24時間以内に治療チームが組まれ、自宅を訪問します。そこで治療チーム（主に看護師や心理士）が複数人数入って、本人や家族・親戚とともに輪になって座り、病状について話し合うだけなのです。対話の時間はせいぜい一時間半まで、内容はどんなことで良いのですが、お互いを尊重し、誰も差別されないような雰囲気です。自由に発言できます。例えば非現実的な幻覚についても、それを実感している患者さんがいる限りは真剣に傾聴されます。既存の医療では本人のいないところで診断・治療・入院が決まってしまうのですが、ここでは一方的な押しつけはありません。この対話が通常は10～12日間、危機が去るまで毎日のように行われ、しかも医療費は一切かからない仕組みがあります。

欧米とは言え、精神医学界では名前も知られていなかった地方病院の試みですので、はじめは注目されませんでした。ところが二十年を経る頃からこのケアのずば抜けた効果が、中心人物のヤーコ・セイックラ博士から次々と医学論文として発表され、世界が無視することができなくなったのです。というのは初発の統合失調症としては世界最高の治癒率で、患者さんの五年後の調査では85%の人達が症状無く、就労など社会生活を営んでいたのです。また、多くが半年以内に良くなり、兆しがあればすぐに介入するため、統合失調症と確定する前に解消されるようになりました。つまり、当地の発症率は大幅に減っているということです。

これまで統合失調症はこころの病気ではなく、脳内のネットワーク異常から発症すると考えられてきました。脳内のドパミン分泌のアンバランスが報告され、このことを根拠に精神医学は病気に陥った人への個別な治療、それも脳という臓器異常への薬物療法に終始していたのです。ところがセイックラ博士らは精神疾患は人間関係に起因すると考えまし

た。そして、病的で閉じられたモノローグ（独白）によって深められた精神症状が、健全で開かれたダイアログ（対話）によって改善していく、という理論を現実的な成果に結びつけたのです。まさにコペルニクスの転回と言えます。

地球全体の命運がかかっている真実として昨今の異常気象や地震活動の増加があります。ところが、地球温暖化ひとつとっても、科学界、経済産業界、国際社会が同じ見解で足並みを揃えることはありません。物理学者デヴィッド・ボームは社会や家庭などあらゆる共同体を協調に導くコミュニケーション技法として、真実をあらかじめ設定しない対話法（ダイアログ）を提案しました。もちろん、現実的には彼の手法は検証されず、21世紀は更に真実を複雑化し、対立構造と混沌を深めています。それに対してオープンダイアログは小さくても現実世界を激変させる可能性を提示しました。様々な情報を集め、自分なりに納得できる真実を追い求める一方で、「真実はひとつではない」という視点を持つことで、物事を俯瞰的に見る余裕ができます。更に、感情や情報に振り回されることなく、相手の真実を否定せずに深く知ろうとする目が養われます。その辛抱強い営みによってのみ、奇跡的に折り合うポイントが発見されるのではないのでしょうか。

本の紹介 その9

生きものの語り

宇根 豊
家の光協会（2015）

－人間が知らない田んぼの世界－

平成の宮澤賢治を想わせる本が出版された。ありふれた「ただの風景」の中に、豊かな生命の蠢きや感動が満ち溢れていることに気づかされる。さまざまな生きものたちが語る田んぼの春夏秋冬が紹介される。これに百姓がくわわる会話は、「すばらしい風景」である。春には、目高・井守・はこべ（繁縷）・なずな（薺）・蓮華など、初夏には、雨蛙・泥鰌・源五郎・燕・たんぽぽ（蒲公英）・あざみ（薊）など、真夏になれば、田亀・雨棒・長足蜘蛛・土竜・浮草・藪甘草など、秋が訪れると、精霊蜻蛉・秋茜・沼蛙・雀・彼岸花・嫁菜などが、そして冬が来れば、真鶴・畑鼠・天道虫・稲・藁・落ち穂などが登場する。もちろん、いつの季節にも百姓と生きものたちのお喋りは続く。

この平成の時代に、こんな本が書ける人は誰だろう。著者が宇根 豊さんと聞けば、この人を知る人は納得する。宇根さんを知らない人のために、氏の姿を紹介しよう。自称、百姓で思想家。僧ではなく農学博士であるが、僧が作務のときに着る衣服のような作務衣をつけている。もちろん草履である。草履はその効果を発揮し、背を低くする。これで大地を見つめながら歩く姿は、まさに思想家である。ベートーベンや宮澤賢治がうつむいて歩く写真を想像されたい。弁が立つ。独特な声で情熱を潤しながらまくしたてる論理に、相手は窮する。なにしろ、田んぼの生きものをこよなく愛し、田んぼと共に生きてきた実践家の論理や思想には、「ただの博士」では太刀打ちできない。

1950年長崎県生まれ。73年から福岡県農業改良普及員。78年から水田の減農薬運動を

提唱。「ただの虫」の概念により、農の全体性へのまなざしを提示。89年から就農。2000年退職後、NPO法人「農と自然の研究所」を設立。「田んぼの生きもの調査」を広めてきた。「まえがき」で語る。「百姓になって一番びっくりしたのは、田んぼの中で腰を伸ばすと、いつも赤蜻蛉の群れに包まれることです。ほんとうに天地は生きもので満ちているものだと感じ、百姓になってよかったと思いました」。なぜ赤蜻蛉が百姓に集まってくるのか。それを知るため、「生きもの調査」を始めて25年が経過した。その集大成を大人にも子どもにも、農を知らない人にも分かりやすく書いたのがこの本である。

春夏秋冬に分けた84ある小話のいずれも、知識と実践からうまれた含蓄のある内容で圧倒される。どの小話を選んでも遜色ないが、あえて一つだけ選んで紹介する。目から鱗が落ちた話である。この小話から、急にものごとの真相や本質が分かる。題して『『稲植え』でなく『田植え』』。以下、原文どおり。

苗が首をひねっていました。

「どうしてぼくたち稲を植えるのに、田を植えるって言うのかな」

田んぼがすぐに反応します。

「それはわたしが聞きたいぐらいだわ」

「有名なことわざがあるよね。お百姓はイネをつくらず田をつくるって。あれと関係あるかな」

「たしかに、米は人間がつくっているのではなく、わたしたち田んぼが育てているようなものね」

「そうさ、人間にできるのは、ぼくたち稲が育つ田んぼを準備するだけだもの」

……省略……

「やっとわかったよ。田植えからあとは、ぼくたち稲も田んぼに含まれるんだね」

「そうよ、青田もあなたたち稲がわたしの上で育った姿を言うよね」

「うん。秋になってぼくたちが黄金色になると、田んぼが色づくと言うよね。これも稲と一体になった表現だね」

「きっと田植えという言葉には、イネを植えてこそ田んぼだ、という気分がこめられているんだわ」

「さあ、明日には、わたしはあなたと一体になって、ほんとうの田んぼになるんだ」

「そう、明日は田植えだ」

ここで、話題を転じる。先日「ゲートキーパースキルアップ」と題した講演を依頼された。この演題の内容が、すぐお分かりになる読者はどれくらいいるだろうか？ 分かる方は、優秀な行政マンか博識な学者であろう。筆者には、これが何を意味するか皆目解らなかった。内閣府資料をみると、「ゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応（悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守

る)を図ることができる人のことで、言わば「命の門番」とも位置付けられる人のことで「す」とある。

続いて「スキルアップ」である。英語の skill up、すなわち技術を向上させることであろう。ゲートキーパーが英語の gatekeeper であるならば、門番、守衛、監視者、情報管理官などを意味するであろう。合わせて、ゲートキーパースキルアップとは「監視者の技術向上」になるだろうか。筆者に与えられた演題を内閣府風に言えば、「言わば命の門番の技術向上」というものであったのかと思われる。

最近の行政用語は、あまりにもカタカナが多すぎる。ゲートキーパーはその代表的な例であろう。西洋の言葉を翻訳するのに多大な努力をした西周（にしあまね）など、国語を大切にしたい明治人の努力を思い起こして欲しい。それとも、言葉に追いついていけない当方に責務があるのだろうか。他にもこんな事例に出くわした。「ロードサイドキオスク（沿道売店？）に緑のおもてなし施設を設置する」「緑のストリートファニチャー（沿道家具？）を整備し、それに緑を付帯する」。

話を戻す。動物や植物の名前を仮名書きにした経緯は、戦後の国語改革にある。正確には、昭和 27 年（1953）学術用語の表記について国語審議会が学術用語分科審議会に回答したことに始まる。仮名書きについては、漢字制限の関係もあって多くの語が仮名書きになっている。動物と植物などに限れば、片仮名と平仮名のどちらを使ってもよいことになった。

更にその後、動物名には平仮名を、植物名には片仮名を、さらにその逆も可、或いはいづれも片仮名または平仮名という緩やかな縛りが生じた。しかし、平仮名は文の中で読みにくいことが理由で、片仮名が多くなったようである。動植物などのほとんどの学術用語が今では片仮名に徹底されている。

本書の快挙は、ほとんどの動物と植物の名前が漢字とふりがなで統一されていることである。名前のない「ただの生きもの」はいない。その名前も固有名詞ゆえに、意味をもつ漢字で命名されている。この所作には、筆者一人で万雷の拍手を送りたい。

種浸花（タネツケバナ）・蓮華（レンゲ）・棘実狐牡丹（トゲミノキツネボタン）・白詰草（シロツメグサ）・目高（メダカ）・姫鉛棒（ヒメアメンボ）・小鬼田平子（コオニダヒラコ）・跳虫（トビムシ）・蚊帳吊草（カヤツリグサ）・御玉杓子（オタマジヤクシ）・源五郎（ゲンゴロウ）・精霊蜻蛉（ショウリョウトンボ）・土竜（モグラ）・子負虫（コオイムシ）・藪甘草（ヤブカンゾウ）・稲苞虫（イナツトムシ）・薄羽黄蜻蛉（ウスバキトンボ）・鳶色雲霞（トビイロウンカ）・稲熱病（イモチビョウ）・小待宵草（コマツヨイグサ）・葉見ず花見ず（ハミズハナミズ）・棲黒横這（ツマグロヨコバイ）・秋茜（アキアカネ）など。

これぐらいでいいだろう。片仮名でかかれた生きもの名前と、漢字で書かれた生きものの違いが判然とする。漢字になると、生き物が生命を湧き立たせる。これ以上、解説を加えるのは野暮というものである。

しかし、著者も困ったようだ。漢字がなく日本国籍をもたない生きものがあつた。たとえばオクラである。夏目漱石の「坊ちゃん」の「猫」よろしく、漢字の名前がまだない。

オクラは、アオイ科の植物、またはその食用果実である。原産地はアフリカ北東部らしい。和名をアメリカネリと言い、ほかに陸蓮根（おかれんこん）の異名もあるという。沖縄県や鹿児島県、伊豆諸島など、この野菜が全国的に普及する昭和 50 年代以前から食べられていた地域では「ネリ」という片仮名で書かれていた。今日では当該地域以外では「オクラ」という英語名称以外では通じない。著者に漢字をつくってもらいたい。と、ここまで書いてオクラ（秋葵）を見つけた。どこまで浸透しているかは分からない。

他には、ジャンボタニシがある。1980 年代に日本に入ってきた。学名は、スクミリンゴガイという淡水棲大型巻貝である。漢字がない。巨大田螺とでも命名するか。

さて、紹介はこのぐらいにして、この本の読み方と扱い方を考えてみた。ざっと眺めて読んで、次に手元に置く。疲れたとき、どのページでも開いて、文章を味わう。宮澤賢治の短編を読むようなつもりで味わう。都会に住んでいる人は、田園を旅するときにこれを携え、春や夏や秋の風の中で読む。近くに田んぼがあれば、水面や稲の中に虫や草や花を探す。

さらに、小中高生にこの本を読んで聞かす。心をこめて、虫や草や花になった気持ちで。それも田んぼのあぜ道で。人間にとって、当たり前で感謝の対象とも思っていなかった田んぼが、愛おしくなる感情が生まれるであろう。稲植えは、田植えで、田植えは、生命の育成の基であることに気が付く子供たちに育てたい。

一緒に自然農法を学びませんか

「将来、自然農法に取り組んでみたい」
「環境に優しい農業をしたい」
「自給自足、家庭菜園のできる生活がしたい」
「食や健康に興味がある」

こんな希望を持った人たちが学んでいます。

農業や食に関心のある人、環境や健康について考えている人、自然農法に少しでも興味がある方、ぜひ、入学してみませんか!?



平成 28 年度

農業大学校

学生募集中

※本校は、農林水産省が行う青年の就農促進事業における研修機関の認定を受けています。就農または雇用就農を強く志願される方を対象に、要件が認められた場合、国から年間 150 万円（最長 2 年間）が給付されます。

★3次募集

願書受付 平成 28 年 1 月 10 日～2 月 5 日

試験日 平成 28 年 2 月 14 日（日）

結果通知 平成 28 年 2 月 22 日

TEL 0558-79-0610
FAX 0558-79-0398
Mail jinodai@moa-inter.or.jp
URL www.iame.or.jp
Facebook www.facebook.com/daigakkou

有機農業研修視察団一大仁農場で食育講座

野菜トランプ出前授業を行っています。

野菜の仲間分け（アブラナ科、ナス科、ウリ科など）や野菜の原産地から野菜の好む環境やその野菜につく害虫など、お子様、お孫さんと一緒に遊びながら学べます。

1 セット

（@1200 円、あそび方説明冊子つき）



野菜トランプ Facebook ページも見えてね。

公益財団法人
農業・環境・健康研究所

〒410-2311 静岡県伊豆の国市浮橋 1606 の 2
☎ 0558-79-1114 FAX 0558-79-0398

トランプの詳細は「野菜トランプ」でネット検索してください。

<https://sites.google.com/site/vegacardes>

寄付のお願い

当財団の事業遂行のための運営資金としての寄付金を募集しています。

国内の個人・法人・団体など、ご賛同くださる方ならどなたでも、おいくらでもご寄付いただけます。当財団の事業にご理解とご賛同をいただき、ご寄付をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

なお、当財団は内閣府の認定を受けた特定公益増進法人であるため、当財団への寄付金については税法上の優遇措置が受けられます。

詳細は下記の問い合わせ先までご連絡下さい。

公益財団法人
農業・環境・健康研究所

〒410-2311 静岡県伊豆の国市浮橋 1601 の 1
☎ 0558-79-1111 FAX 0558-79-0216



◆ 寄付の種類

(1) 一般寄付金：特に用途のご指定がない寄付

（技術開発・調査研究等、事業全般に対して）

(2) 特定寄付金：用途を特定される寄付

（申込書に用途を特定する内容を記入ください）

◆ 申込方法

1,000 円以上のご寄付の場合は「寄付金申込書」に必要事項を記入の上、ファックスもしくは郵送にてお申し込みください。詳しくは以下までお問い合わせください。

（1,000 円未満の場合の申込書は不要です）

◆ 振込銀行

三菱東京UFJ銀行	三島支店
普通預金	No.3090141
スルガ銀行	熱海駅支店
普通預金	No.1860808
ゆうちょ銀行	〇八九支店
当座預金	No.0198370

申し込みなどの詳細は URL <http://www.iame.or.jp/> E-mail nokanken@izu.biz

ノコンギク



伊豆の国だより 第 11 号

編集・発行 公益財団法人 農業・環境・健康研究所
発行日 平成 28 年 1 月 1 日



問い合わせ先

〒 410-2311 静岡県伊豆の国市浮橋 1606 の 2

☎ 0558-79-1114 FAX 0558-79-0398

URL <http://www.iame.or.jp>

本誌の無断転用はお断りします。